中京大学英米文化・文学会講演会報告

秋 季 大 会

ミシシッピ大学教授　ドナルド・M・カーティゲイナー氏

"*As I Lay Dying* Between Modernism and Postmodernism"

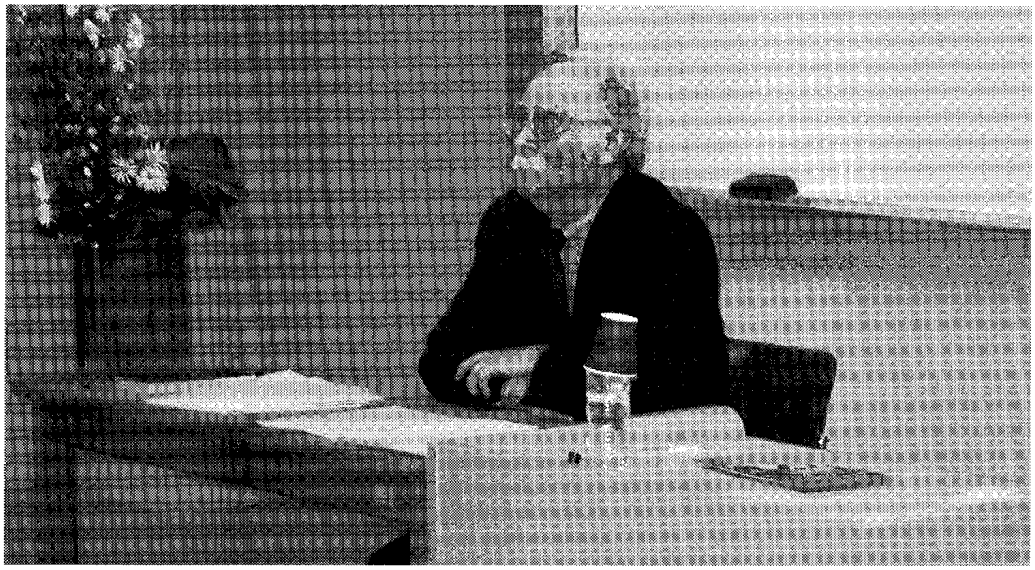
2005 年 11 月 19 日（土）、中京大学英米文化・文学会秋季大会特別講演会が、センタービル 08A 教室にて開催された。以下に講演の要旨を記す。

講師のドナルド・M・カーティゲイナー氏は、ミシシッピ大学フォークナー講座の主任教授である。今回の講演は、フォークナーの小説 *As I Lay Dying* をモダニズムとポストモダニズムの狭間にある小説として再定義する、学術的にも意義深いものであった。

氏は、モダニズムとポストモダニズムを、それぞれ芸術表現上の戦略の精緻化と、その表現に対する自己参照性とをもって定義する。フォークナーの *As I Lay Dying* は、亡母アディ・バンドレンの亡骸を故郷のジェファソンに埋葬するために、家族一同が九日間にわたる苦難に満ちた旅を行う様子を描いているが、物語の進行それ自体が、こうした二つの流派の間に立ち、文学作品としての自己表現を精緻化するとともに、その技巧性を暴露するという形式的特徴を持っている。

こうした自己生成の過程と、それに対する自意識的な抵抗が物語の内部でせめぎ合う様子は、作中における二人の主要な登場人物に

よって代表される。一人はこの小説の物語/行為の動因となるアディであり、死んだ彼女自身の語る回想的なモノローグは、この物語全体が、緩慢な死のプロセスとしての人生というフロイト的なモチーフを前面に押し出しつつ、最終的には多くの犠牲を払いつつも、再び残された家族に生への道程を示す結果をもたらす。一方で、彼女の息子たちのひとりであるダール・バンドレンは、人生の「迂回路」を表象するこの葬送行自体を打ち切り、拙速に生を終了させようとする死の衝動の化身である。だが彼の試みは、他の家族たちの強い生への執着によって打ち砕かれ、最終的には、彼が生を危険にさらす狂気と見做されて、家族たちの共同体から排斥されることで旅は終了する。こうした過程を通じて、生を死へ向かう旅の形象として描き出すモダニズム的な手法をとって描き出す本作自体が、その物語の進行に応じて、物語の進行を中絶しようとする様子をも、自己照射的に表していることが、本作がモダニズムとポストモダニズムの狭間に立つと見做しえる由縁である、とカーティゲイナー氏は主張する。



さらにフォークナー自身の作家生命の危機と、その回復の過程を読み込むことで、作家の置かれた状況とその内面を吐露しつつ、そこからの逃避／再生を描き出す作品として、*As I Lay Dying* に対する新たな評価の観点を示して、講演は終了した。

当日は教員、学外からの聴講者を含めて 20 余名の参加者があり、フロアからも活発な質疑応答がなされ、講演会は盛会のうちに幕を閉じた。

（国際英語学部助教授　森　有礼）